

## 審査結果の要旨

氏名 桑原直己

桑原直己氏は、本論文において、トマス・アクィナスの倫理学の哲学的意義を、「愛」と「正義」を鍵概念として、アリストテレスの「性向 (hexis)」としての徳の倫理学の哲学的な枠組みがトマスの思想体系において「記述のための概念装置」として機能しているという観点から解明し、さらに、思想史的に未だ未開拓である、トマスにおける倫理学と形而上学的人間論および徳論との連関を示すことを試みている。

第一部「トマス倫理学の基本的性格」においては、トマスの倫理学が、アリストテレスの「哲学的倫理学」を承けつつも、人間の自然本性を「自己超越的なもの」と捉え、キリスト教的・神学的な「愛」と「正義」の理論によってアリストテレスの「哲学的倫理学」を越えるものであるということが明らかにされるとともに、論文全体の方位が示されている。

第二部「人間的自然本性の自己完成と対他性 - アリストテレス的倫理学の継承 -」においては、「正義」の徳が示す、隣人に対する「対他的自己超越」の方位を担う倫理学が考証され、トマスはアリストテレス倫理学における「正義」と「愛」の関係を、対他的な「正義」の徳と、魂の内的な完全性をもたらす徳に裏打ちされた「友愛」の関係に転意させたということが示され、トマス倫理学においては、アリストテレス的概念枠において魂の内的な完成・現実態性として「生命エネルギーの充溢」を示す徳が、正義を踏まえつつ「正義」の徳を越える「友愛」の根拠になっているということが明らかにされている。

第三部「人間的自然本性の自己超越 - 恩恵の倫理学 -」においては、トマスにおけるキリスト教固有の「愛」の倫理が、恩恵および、「神愛」の徳に基づく神に向けての「自己超越」の倫理として考察されている。それは、アリストテレス的な「徳」概念ないし「性向」概念が、神からの恩恵の注賦 (infusio) という思想的契機によって拡張され、トマス倫理学の固有性が明示される考察となっている。その考察は、『ローマ書簡』第五章第五節と、アウグスティヌス、さらにはペトルス・ロンバルドゥスなどのテキストの分析を方法論的に媒介してなされるが、それは同時に古代・中世の倫理思想史の再解釈ともなっている。

第四部「愛と正義の諸相」においては、「神愛」の分析と憐れみなどへの展開が考究され、それと並行して正義も、社会的・ポリスの正義から罪業を孕む人間本性の義化という視点にまで深められて考究され、自己超越と対他性の諸相と、それらが交錯するトマス倫理学の本質と今日的可能性とが提示されている。

本論文は、トマスの倫理学をトマス独自の形而上学をも射程に入れて包括的に解明することを試みた力作であるが、トマスの形而上学そのものについては更に踏み込んだ研究が必要であろう。とは言え、研究の射程の広さと水準の高さ、また、トマスの徳論の未開の分野（恩恵など）の開拓、現代の倫理学に対するインパクトなど、高く評価されるべき点が多い。以上の点を勘案し、本論文を博士（文学）の学位授与に値するものと判定する。